

妃殿下から、殿下の伝記（記録）作成の御指示があり、特に軍隊時代については卯月会に担当してほしいとの御指示がありました。

しかし当時の殆どの軍人は日記を付けておられましたが、殿下は何故か日記を付けておられず、支那における若杉参謀時代の行動等、若き時代の行動や心の葛藤等を把握するための背景や本心が不明な部分が多く、真相がわからずに誤解されている面があるのではないかと危惧をしております。

兄君の海軍に行かれた高松宮殿下は、戦争前中後の混乱期に克明に日記を付け、第一級と言われる資料を残されておられ、今回も大いに参考になりました。戦後、三笠宮殿下は歴史学者として天才的な手腕を発揮され数多くの貴重な資料を残されましたが、戦時中のお立場で自ら書かれたものは殆ど見当たらず、伝記作成にも大きな問題となっております。

一方、青年時代を軍隊で過ごされた事は最後まで大切にされ、特に陸士・陸大の同期生間の絆は大事にされ、任官後の同期生会は、戦後も含め、任官後70年間も欠かさずに御出席され、同期生団結の要・象徴として活動されて来られました。

●御遺稿の紹介

平成18年、陸軍士官任官七十周年を記念して、「任官七十周年 記念会誌 陸士四十八期生会（卯月会）」が発行され

四十八期

（卯月会）

担当者
衣笠 陽雄

●三笠宮殿下の薨去後

陸士四十八期生会（卯月会）の象徴的存在であられた三笠宮崇仁親王殿下が、平成28年10月、満百歳を以て薨去された。以来4年の月日が流れました。

その間、若手二世が、殿下・父達の遺志を継いで残された各種資料を基にその功績を後世に伝えんと細々乍らも活動を継続しております。特に先年、ご存命の

ました。発行時、陸士卒業同期生388名の内、生存同期生42名・平均年齢91歳で卒業時の一割まで減少していました。このような中、お元気であられた殿下は記念会誌の巻頭記事「桜と日本人」を投稿されました。

今この記事を精読しますと、桜が過去から如何に日本人に多大な影響を与え特に民族の精神形成に寄与したかが分かります。最後の記念会誌の掉尾を飾るに相応しい内容です。ただ浮かれて花を愛でるのではなく桜の持つ魅力・神秘性等々思いを入れながら鑑賞したいという心が動きます。

今年も桜は咲きます。殿下の記事を読まれてから花見に行かれれば、今までも一味違う花見になると思います。

会員皆様の花見前の一読を是非お勧め致したく花だよりに投稿したのですが、編集委員会の勧めもあり、今月号の巻頭に掲載されています。